

コロナ禍の遠隔授業における主体的な学び — TOEIC® 対策授業アンケートの計量テキスト分析から —

宮原 淳

岐阜聖徳学園大学外国語学部

Proactive learning in the midst of COVID-19 pandemic: Quantitative Text Analysis on TOEIC Class Students' Reflections

Atsushi MIYAHARA

キーワード：コロナ禍 遠隔授業 主体的な学び TOEIC ポートフォリオ

I. はじめに —問題の所在と目的—

2020年度前期、コロナ禍での遠隔授業において、筆者はTOEIC®対策授業を行った¹⁾。緊急事態宣言下、オンラインのみでの授業を見切り発車するしか選択肢はない状況下でも、成果を見出すしかない。学生は一人一人が孤立した「ステイ・ホーム」の環境で、自ら主体的に学ぶことが強いられた。

「主体的に学ぶ」という視座は、コロナ禍以前から、日本の大学の課題として挙げられていた。苑(2017: 154)は、日本の大学が自律的な学習に十分な時間をかけるよう導くことを理念にしてこなかったため、大学のICT活用の遅れは技術的な理由よりも「理念の問題に帰す」と論じる²⁾。

コロナ禍において、技術的な理由ではない部分、つまり、「主体的に学ぶ」という理念が原因で学習を遅らせるわけにはいかない。筆者はこのような問題意識に立脚し、単に、従来の対面授業をそのままオンラインに持っていくのではなく、オンラインならではの教育環境を活用することを模索し、遠隔授業をデザインした。この問題意識は、コロナ禍以前のTOEIC対策授業において、動機付けやメタ認知などの概念を通して、主体的な学びを研究題材にしてきたことを反映している。

本報告の目的は、主体的な学びという観点から、遠隔授業がどのような学びのプロセスであったかを記述し、遠隔授業にどのような利点を見出すことができるかを総括することである。最初に、ポートフォリオ活用等、主体的な学びに関連する理論的背景を整理し、続いて、授業の概要を示す。授業の中間8回目と15回目の最終回で行った自由記述アンケートを計量テキスト分析の手法によって分析し、遠隔授業の利点を見出す。

II. 背景

「主体的な学び」は、文科省によると「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」とされている³⁾。TOEICの対策は、スコアが就職活動や教員採用試験で必要な場面があるため、特に、「キャリア形成」という目標を立てやすく、動機付けにもなる。さらに、「粘り強く取り組む」点では、試験対策が長期的な視野が必要であること、そのためには、「振り返って次につなげる」ことが欠かせないことから、TOEICを目指した学習は主体的な学びそのものであると言える。

このような主体的な学びに効果を期待できるのがポートフォリオである。小嶋(2010: 146)は「学生の自律的成長に何らかの効果を及ぼすと期待され、ポートフォリオの授業への導入が注目されているようだ」と指摘している⁴⁾。

ポートフォリオは様々な形式があるが、特に本論の遠隔授業では「eポートフォリオ」(電子的に扱

うポートフォリオ)であり、これは、「電子的に蓄積された履歴、成果物などを評価(自己評価・他己評価)や共有を通して俯瞰することで、学びのプロセスを振り返り、次の課題へつなげていくことを支援するツール」である(小川、2012: ix)⁵⁾。スミス(2012: 5)によれば、この「ツール」は、学生の学習の証拠を記述、収集し、自身の学習の振り返りを促すことを支援するものである⁶⁾。TOEIC対策において具体的には、問題を問いた結果や自己分析の記述などが想定できる。

下(2007)は、ポートフォリオの利点について次の5点を挙げ、振り返る機会になると同時に、個々のニーズに合う主体的な学びへの効果を認めている⁷⁾。

- ・学習者が学習の過程を振り返ることができること
- ・一定の期間に亘る継続的な評価が行えること
- ・学習者独自のものが作成でき、従来のテストに比べて、達成感を感じることができること
- ・自分の学習管理を行うことで、学習に対する責任感を高めることができること
- ・学習を振り返ることで、弱点や力の向上を評価し、目標を(再)設定するのに役立つこと

このように記録を残すことで、「見える化」という意義も想定できる(岩井、2012: 212)⁸⁾。ただし、このような振り返りの作業を進めるプロセスで、必要な配慮もある。例えば、松崎・北條(2007)は、英語のライティング学習においてポートフォリオを用いた調査で、ガイドラインの事前明示やカンファレンスの実施などが必要であると指摘している⁹⁾。カンファレンスとは、「ポートフォリオの作成をとおして学習したことを、教師と学習者とが対話や話し合いをしながら振り返る場」であり、特に振り返る作業が独りよがりにならないような仕掛けである。また、振り返りの作業では、自己省察・自己の学習のモニターに不慣れな学生も少なくないことを想定すると、ポートフォリオの具体的な実例を詳しく説明する、あるいは場合によってはサンプルを示す方が良い場合もある(峯石、2010: 227)¹⁰⁾。

以上のような振り返りの作業に配慮しながら、主体的な学びを実践するために有益であると思われるeポートフォリオを導入し、次項のように授業を実践した。

Ⅲ. 調査

1. 調査対象と授業概要

調査対象は、外国語学部2年生のTOEIC対策に特化した「キャリアセミナーⅢ」で、受講生は計55人である。本学におけるTOEIC対策は、1年生から3年生まで合計6の講座(「キャリアセミナーⅠ-Ⅵ」)を開講していて、いずれも選択科目である。学部内におけるTOEICスコアの実績では2019年度で上位が非ネイティブとしては最高レベルとされる900点台が複数名ある一方で、下位は300点台であり、差が大きく見られるため、スコアによるクラス分けを行っている。1年生は入学直後の受験、2年生・3年生は前年度の最高点を反映していて、いずれの学年もTOEIC受験は必須である。今回の調査対象は450点以下を主な対象に600点以上を目指すレベルを想定したクラスであるが、留学後の3年生など履修上の都合から想定レベルを超えた受講生も含まれている。

授業はリアルタイム配信で、Google Meetを使った。毎回の授業構成は、(1)冒頭で目標を提示し(例えば「Part 5の文法問題で関係代名詞」など)、(2)いったん各自のオフライン活動として、約30分間、テキストの問題を解く指示をし(それぞれの問題に分単位で時間を設定)、(3)その後Google Meetで再集合し、リアルタイムで解説をした。さらに、必要に応じて、文法項目や長文問題の解き方など、繰り返して復習を促したい要素は15分以内の動画にまとめて配信した。15回の授業で合計20本の動画をYouTubeに公開した。

以上のような授業構成で各回の締めくくりとして、Google Formを使い、ポートフォリオの提出を課した。記述内容は、解いた問題の出来具合について自己分析、弱点と今後の自己課題など各自が毎回の授業内容を振り返るものであり、実際に解いて解説を確認しなければ記述できないような記述項目である。なお、毎回、2分程度の単語テストを行なって各自その場で自己採点をした後、ポートフォリオに

出来具合や自己課題、今後の対策すべきポイントなどのコメント欄をもうけた。ポートフォリオの締め切りは毎回授業後から次週の授業の前日までとした。

双方向のコミュニケーションを可能とするデジタル環境を活かすため、提出されたポートフォリオで主な事例は次の授業の冒頭で紹介したり、質問に答えたりするなどしてレスポンスした。

以上が毎回の授業構成であるが、さらに、前述の峯石の指摘等を参考に、8回目の授業で「カンファレンス」を行い、提出されたポートフォリオの記述例を無記名で紹介し、ポートフォリオについてのアンケートを行なった。これは、前述のポートフォリオの利点5点について、受講生自身はどう思うかを、5段階の選択肢（「そう思う」など）とその理由を自由記述で回答を求めた。この利点については、解答者に先入観を与えないよう、先行研究で利点として指摘されていることは事前に明かさず、かつ無記名で率直な感想を促した。さらに、最終回15回目にもアンケートを行ない、2項目（「ポートフォリオは有益だった」、「従来の対面授業とは異なるような、遠隔授業ならではの効果がある」）について、8回目アンケートと同様、5段階の選択肢とその理由についての自由記述を求めた。次項で分析対象とするのは以上の2回のアンケートである。

2. 調査方法

アンケートのうち、自由記述については計量テキスト分析を行い、フリーソフトウェア「KH Coder」(樋口, 2014) を活用する¹¹⁾。計量テキスト分析は、質的データを数値化して分析する計量的分析手法を用い、テキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う手法である(樋口, 2014:15)。具体的には、自由記述中に多く出現する頻出語を探索的に分析を進めつつ、出現頻度2回以上の単語に着目した(それぞれの語がどのように語られたかを掴むために出現頻度は少ないものまで含めた)。それらを意味のまとまりごとに集約していくため、KH Coder の「階層的クラスター分析」機能を用いた。その上で、クラスター分析によって明らかになった似通った文脈で使われていた語のグループについて、実際にどのような内容のコメントが見られたかという分析を次項のように試みた。

3. 調査結果

表1 ポートフォリオの利点についての意識 (%) n=55

(A: とてもそう思う、B: そう思う、C: どちらとも言えない、D: そう思わない、E: まったくそう思わない)

質問項目	A	B	C	D	E
学習の過程を振り返ることで効果がある	56.4	43.6	0	0	0
学習の継続につながっている	30.9	47.3	18.2	3.6	0
学習者独自のものが作成でき、達成感を感じる	21.8	60.0	18.2	0	0
自分の学習管理を行うことで、学習に対する責任を高めることができる	38.2	50.9	5.5	3.6	1.8
弱点や力の向上を評価し目標を設定するのに役立つ	60.0	36.0	4.0	0	0

表1に示した8回目のアンケートでのポートフォリオの利点については、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が高かった順に以下の通りである。

- (1) 学習の過程を振り返ることで効果がある (100%)
- (2) 弱点や力の向上を評価し目標を設定するのに役立つ (96.4%)
- (3) 自分の学習管理を行うことで、学習に対する責任を高めることができる (89.1%)
- (4) 学習者独自のものが作成でき、達成感を感じる (81.8%)
- (5) 学習の継続につながっている (78.2%)

表2 前期授業についての意識 (%) n=50

(A とてもそう思う、B: そう思う、C: どちらとも言えない、D: そう思わない、E: まったくそう思わない)

質問項目	A	B	C	D	E
ポートフォリオは有益であった	48.0	46.0	4.0	2.0	0
従来の対面授業とは異なるような、遠隔授業ならではの効果がある	32.0	38.0	20.0	10.0	0

表2の15回目のアンケートでは、「ポートフォリオは有益だった」に対して「とてもそう思う」と「そう思う」の合計は94%であった。これに対しての理由の自由記述は、2回以上出現した頻出68語を取り出してクラスター分析を行い、8つのクラスターを得た(資料1)。各クラスターで頻出が多い単語を中心に解釈をしたものが、表3である。表3には、クラスターを作る単語と実際の記述事例を併記した。15回目のアンケートでもう一つの項目、「従来の対面授業とは異なるような、遠隔授業ならではの効果がある」に対して、「とてもそう思う」「そう思う」の合計は70%であった。上述の項目と同様、2回以上出現した頻出84語を取り出してクラスター分析を行い、9つのクラスターを得た(資料2)。頻出単語の解釈と記述例が表4である。

表3 ポートフォリオについての自由記述

解釈 (下線は頻出単語)	記述事例
単語などを復習できる	単語やTOEICの解き方の復習ができ、実力が上がったから。かなり低い実力から少し上がった <u>だけなので続ける必要はあるが確実に成果は</u> でている
間違いを繰り返さなくなる	以前は問題を解いて、理解して終わりだったので、数時間後にはどんな問題を解いたかすら忘れていました。ポートフォリオを作成することによって自分の弱点が可視化できるので <u>間違いを繰り返さないところ</u> がいいと思います。
書くことによって真剣に取り組める	毎回自分の出来やつまづいた箇所を振り返ることにより、自分の苦手な箇所を見つけることができる。前回よりも <u>真剣に取り組んでいなかったことが</u> ポートフォリオを書くことにより明らかに内容の差でわかるため、自分にしっかりやらなくてはいけないと思わせてくれるものでもあったから。
毎週反省をし、次につながる	毎週提出があることできちんとやろうという意識が持てるようになりましたし、次はこうしていこう、ここを勉強しようと思えるようになれたと思ったからです。
自分の苦手や弱点を振り返られる	苦手なパートはわかっていたのですが、そのパートのどこが苦手なのかわかっていなくてただただ問題を解いて慣れるしかないとおもっていましたが、ポートフォリオで振り返ることによって自分の問題点がより明確にわかり、対策方法がわかったため。
記録を残し、あとで確認できるようになった	自分が間違えた部分や言い換え表現などをノートに記載することで、再確認ができるのと自分がどうして間違えたのかを記録しておくことができ、TOEIC本番で、見返すことができるのでいいと思いました。
成長の記録が残せる	自分の成長記録のように感じ、間違いなど記載するため最初より少しは成長したと思えた。
客観的に見直す機会になる	自分の学習状況を客観的に見ることができ、現状の把握ができるから。また、その記録の中でどのように改善したらこのような結果になったが一眼見て振り返れるから。

表 4 遠隔授業の利点についての自由記述

解釈（下線は頻出単語）	記述事例
自分自身で <u>取り組む</u>	対面授業ほどの緊張感はないと思ったけれど、その分少しでも怠けるとすぐ結果に現れる。いかに怠けずに課題に <u>取り組めるか</u> 、自分自身 ^が 一人で集中できるか知ることができる <u>貴重な機会</u> だった。
<u>勉強時間が増える</u>	家での <u>時間が多い</u> 為課題や TOEIC に割く <u>時間が増え</u> 、以前よりも家での <u>学習時間が増えた</u> 。
自宅で <u>集中</u> できる	正直言ってオンライン授業の方が私は好きです。個人的に家の方が集中できるし、学校の自転車での行き帰りの1時間を単語覚えにあてられるので、時間を <u>有効活用</u> できます。
<u>進んで学習し</u> 、 <u>習慣化</u> する	最初は対面授業でないことに不安を感じていたが、遠隔授業なことから自分で <u>進んで</u> 学習する習慣がついたから。また、自分の周りに誰もいないことからより自分の学習に対して責任感を持ち学習を <u>進めなければならぬ</u> こと、人任せで無く自分から <u>進んで</u> 学習をしなければ自分がやった部分しか効果は出ないことを改めて実感したから。
自分の <u>ペース</u> で <u>問題を解く</u> ことができる	自分の <u>ペース</u> で単語を覚えたり、時間制限を設けるところはしっかりと設定してだらけずに進めることができたから。
<u>主体的に</u> 自身と向き合う	自分から <u>主体的</u> にならないと勉強をがんばれないので、よい <u>成長</u> ができたと考える。
自分を見つめ直す	対面授業であるとほかの生徒も見ることで自分自身のモチベーションをあげることができるけれど遠隔であると身近な人での交流になるのでほんとに置いて行かれてしまうのだと怖くなった。遠隔であると自分を見つめ直すいい機会であったように感じた。
自分でやった分だけ <u>効果</u> になる	最初は対面授業でないことに不安を感じていたが、遠隔授業なことから自分で <u>進んで</u> 学習する習慣がついたから。また、自分の周りに誰もいないことからより自分の学習に対して責任感を持ち学習を <u>進めなければならぬ</u> こと、人任せで無く自分から <u>進んで</u> 学習をしなければ自分がやった部分しか <u>効果</u> は出ないことを改めて実感したから
勉強の <u>方法</u> が変わった	自分の <u>苦手</u> を発見することで、自分に合った勉強の <u>仕方</u> が分かった。

IV. 考察

学生が感じたポートフォリオの利点は、表1に見られるように先行研究での指摘を裏付けるものであり、中でも特に、振り返ることや弱点を見つけることなど自己分析を促す効果が、表2で示した8回目のアンケートで明らかになった。これはさらに、表3の15回目の自由記述で浮き彫りになった要素からも同様で、ポートフォリオが復習のきっかけになり、弱点や苦手を振り返ることで、客観的に見直し、反省ができるという特徴が際立った。このプロセスによって課題に真剣に取り組むことになる姿を推察することができる。以上のように、記録を残すことはデジタル環境こそ好都合で、主体的に勉強方法を考えるきっかけにはなったのではないかと思われる。

また、クラスター分析は限定的な分析対象であるが、表4で見出せる遠隔授業の利点を総合すると、自ら進んで取り組み、自分自身を見つめ直す主体的な学びという点での価値を見出している学生の存在が浮き彫りになった。そのために、集中できる環境やペースを作り、習慣化するなどして勉強時間を確保することの重要性も併せて指摘することができる。

クラスター分析から遠隔授業の課題も捉えることができる。特に環境面では、自分のペースを作って習慣化するなどして勉強時間を確保すること、集中できる環境を作ることなどである。このクラスター分析と同様、8回目のアンケートでも、「継続力」はポートフォリオの利点5点の中で最も低い数値であった。これらの結果は、授業において、習慣化、継続を促すことの必要性を示唆するものだと言えるであろう。

V. まとめと課題

コロナ禍で学びの機会が頓挫することが危惧された 2020 年前期の遠隔授業は、主体的な学び、つまり、学生が自ら進んで課題に取り組み、勉強方法や苦手項目など自分自身を見つめ直すプロセスとすることが可能な機会であった、ということがアンケートから推察された。コロナ禍が社会に多様な影響を及ぼした中で、教育においては「主体的な学び」という現代的な課題を前進させるチャンスになったのではないだろうか。「主体的な学び」の手段として導入したポートフォリオについては、個々人が大人数クラスなどでは見過ごしがちな自分自身の弱点を自己分析し、一人の閉鎖的な「ステイホーム」の環境で受講していても独りよがりには陥らず、自己客観視するきっかけになった。

このように学生自身が勉強方法を熟慮することは、学びの方法を身につけるプロセスだとも言えるだろう。そうなれば、TOEIC のような試験勉強でも、単にテストのための暗記やスコアだけを目的としたいっときの詰め込みで終わらず、外国語教育の幅広い題材や目的の学びでも各自が応用、転用可能である。

本稿は対面とオンラインのどちらがより望ましい効果を引き出すかなどという比較をする意図はない。ポスト・コロナ時代、遠隔授業のない状態でも、コロナ禍の経験は緊急時の特殊な過去として失われていくのではなく、むしろ、主体的な学びを促す手がかりとして意義を受け継ぎ、発展させていくことが可能だと思われる。本報告はたった一例の模索で限定的な分析対象にすぎないが、今後も、教育のデジタル化での主体的な学びの検証を続け、特に、教育的効果の測定等、本稿で議論を踏み込めていない点を今後の課題としていきたい。TOEIC 対策という授業の特性から、スコアの変化などから効果は検証可能であり、また、ポートフォリオについては、これを成績評価にどう結びつけるかなどの課題も検証が必要である。

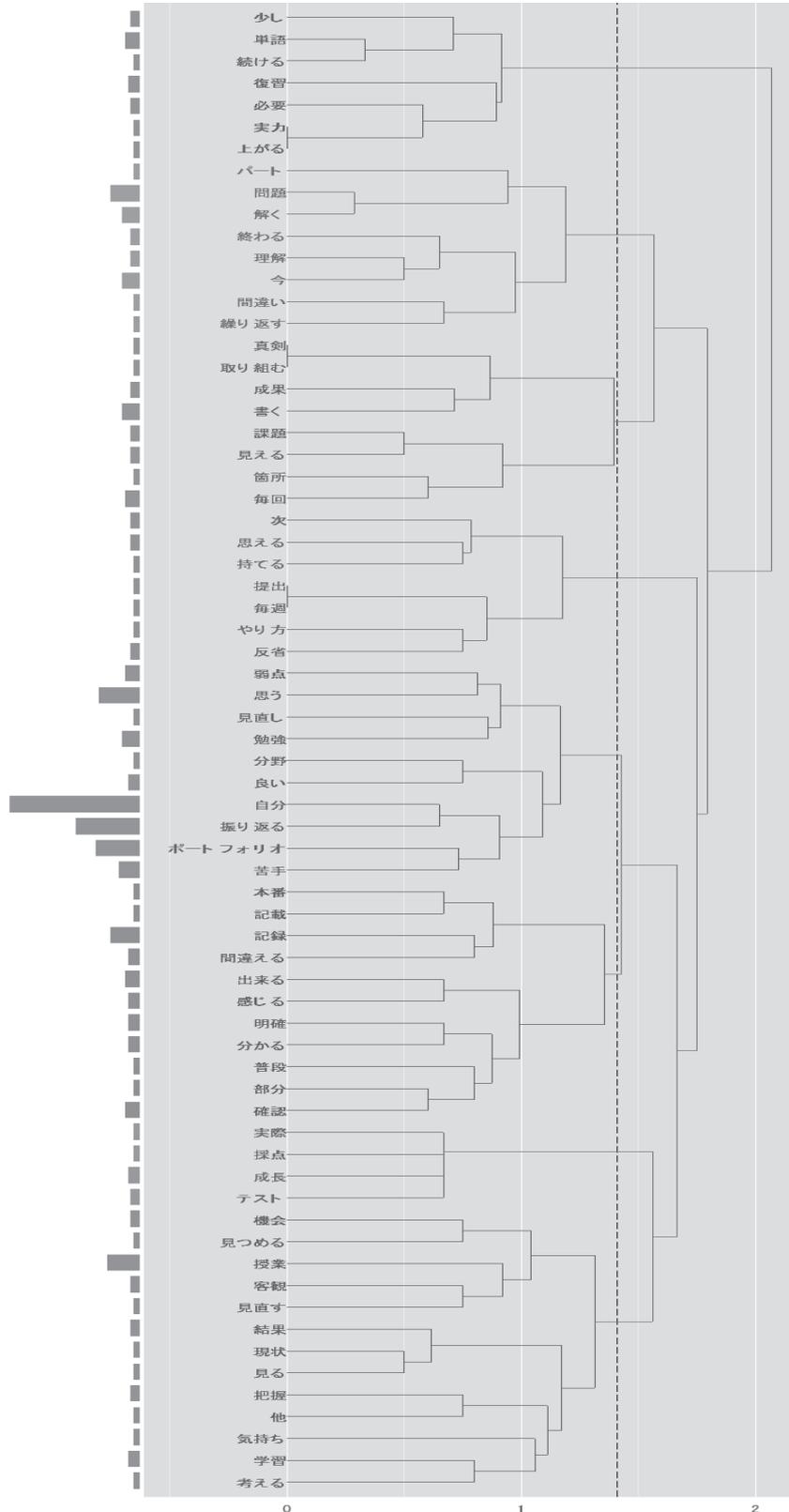
注・文献

- 1) TOEIC はエデュケーショナル・テスト・サービス (ETS) の登録商標。この論文は ETS の検計を受けまたその承認を得たものではない。本稿で言う TOEIC は TOEIC Listening & Reading Test である。
- 2) 苑復傑 (2017) : 大学の授業と ICT 活用, 「教育のための ICT 活用」(中川一史・苑復傑編), 放送大学教育振興会, 東京, 138-156.
- 3) 文部科学省 : 「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
(参照日 2020/10/10)
- 4) 小嶋英夫 (2010) : 学習者と指導者の自律的成長, 「成長する英語学習者—学習者要因と自律学習」(小嶋英夫・尾関直子・廣森友人編), 大修館書店, 東京, 133-161.
- 5) 小川賀代 (2012) : はじめに, 「大学力を高める e ポートフォリオ」(小川賀代、小村道昭編), 東京電機大学出版局, 東京, ix .
- 6) ジャニス・A・スミス (2012) : ポートフォリオ総論—海外の活用から, 「大学力を高める e ポートフォリオ」(小川賀代、小村道昭編), 東京電機大学出版局, 東京, 5.
- 7) 下絵津子 (2007) : 第二言語教育におけるポートフォリオの活用, 宮崎公立大学人文学部紀要, 14(1), 149-167.
- 8) 岩井洋 (2012) : e ポートフォリオを活用した教育改善の可能性, 「大学力を高める e ポートフォリオ」(小川賀代、小村道昭編), 東京電機大学出版局, 東京, 210-225.
- 9) 松崎邦守・北條礼子 (2007) : ポートフォリオを教授ツールとして活用する授業設計の検討 : K 看護専門学校における英語のライティング学習を事例として, 日本教育工学会論文誌, 31(1), 69-77.
- 10) 峯石緑 (2010) : 大学英語教育への応用 7. ポートフォリオを使用した大学英語教育実現にむけて, 「成長する英語学習者— 学習者要因と自律学習」(小嶋英夫・尾関直子・廣森友人編), 大修館書店,

東京, 225-227.

11) 樋口耕一 (2014) : 「社会調査のための計量テキスト分析」, ナカニシヤ出版, 京都.

資料1 「ポートフォリオは有益だった」についての自由記述



資料2 「遠隔授業ならではの効果」についての自由記述

